

平成28年度
「森の巨人たち百選」ウタラ川の
オヒルギ調査報告書

2017/03/31

九州森林管理局 計画保全部
西表森林生態系保全センター

「森の巨人たち百選」ウタラ川のおヒルギのモニタリングについて

1 はじめに

九州から南西へ約 1,000 km (図 1) の洋上に位置する西表島は、28,927ha の面積を有し、その約 90% は亜熱帯の自然林で覆われている。

また、島の面積の約 8 割を国有林が占めている。気候は、温湿な亜熱帯気候に属し年間を通じて降水量が豊富で大小無数の河川が形成され、広大なマングローブ林を含んでおり、希少野生動植物の宝庫となっている。

この西表島北西部を流れる浦内川支流のウタラ川上流に生育しているおヒルギは、平成 12 年 4 月に「森の巨人たち百選」に選定され、平成 13 年 4 月には竹富町が主催する「西表島巨樹・巨木保全協議会」(以下、保全協議会という。)が設立され必要な保全対策が講じられている。



図 1 西表島の位置

2 生育地の概況

生育地は、西表島の北西部に位置する上原国有林 209 林班イ小班 (図 2) 内で、浦内川の支流のウタラ川上流部に位置し、おヒルギを優占種としたマングローブ林で、一部陸地化してサガリバナやアダン等が混生しており、満潮時には海水に浸る泥湿地帯である。

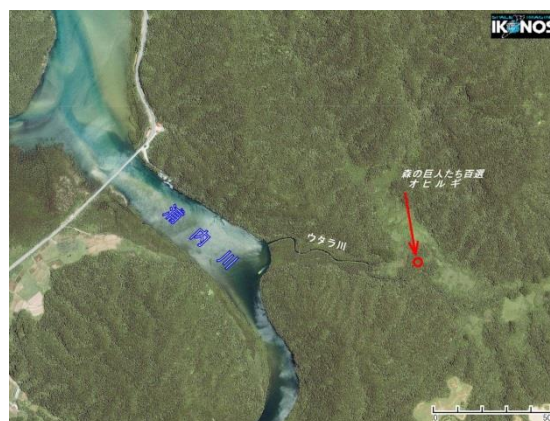


図 2 おヒルギの位置

3 保全経緯

平成 17 年度に開催された「保全協議会」の総会において、近年の台風等の影響でおヒルギの枝が折損しており樹勢調査を行いたいとの提案があり、琉球大学熱帯生物圏研究センターの馬場繁幸教授 (当時) 及び西表森林環境保全ふれあいセンター (現在は西表森林生態系保全センター) が依頼を受けて樹勢調査を実施した。

調査の結果、①枝を台風等の被害から守るための木製支柱の設置、②おヒルギ周辺の土砂の除去、③乾燥防止等のための水路の作設、④腐朽箇所除去、殺菌剤塗布及び腐朽防止剤の充填、⑤樹勢の変化を継続的にモニタリングすること等を「保全協議会」へ報告し、平成 18 年 5 月に樹勢回復措置が実施された。



写真1 保全措置後のオヒルギの状況(H28. 6. 17 撮影)

その後、オヒルギは良好に生育を維持してきたところであるが、その後7年が経過し腐朽の進行も見られたことから、「保全協議会」において平成24年3月に樹木医診断が実施され、倒木・枝折れ防止のさらなる対策を講じる必要があるとされた。

また、当センターからモニタリング調査に基づき、オヒルギの周囲がシャコ塚により隆起してきているため、アダンなどの陸生植物の侵入を招き、今後のオヒルギの生育に支障が生じる可能性があること等につ

いて、「保全協議会」に報告を行った。このことを受け「保全協議会」において、平成26年3月に倒木・枝折れ防止の支柱の補強及びシャコ塚除去の保全措置（写真1）が行われた。

4 モニタリング調査

平成27年度からは、保全措置後のオヒルギ及び周辺状況等の変化をモニタリングして行く必要があることから、地盤高や定点撮影箇所等について、新たなコードラート区域を設定(図3)し、以下の項目についてモニタリングを実施した。

(1) 生育状況

オヒルギの樹高、胸高直径、根回りを測定するとともに、目視により樹幹の状況を調査し樹勢の変化を観測した。

(2) 周囲の光環境（開空度）

コードラート内に設けたJ2、J5の2点において、上空の樹冠状況を撮影して開空度を算出して、光環境の変化を観測した。

(3) 地盤高

コードラート内J1～J6の6点において地盤高を測定し変化を観測した。

(4) 周辺植生及び着生植物

コードラート内S1～S4に生育している周辺植生を測定して周辺状況の変化を観測するとともに、着生植物について目視により観測した。

(5) 定点撮影

コードラート内P1～P4の4点において定点撮影を行いオヒルギの変化を観測した。

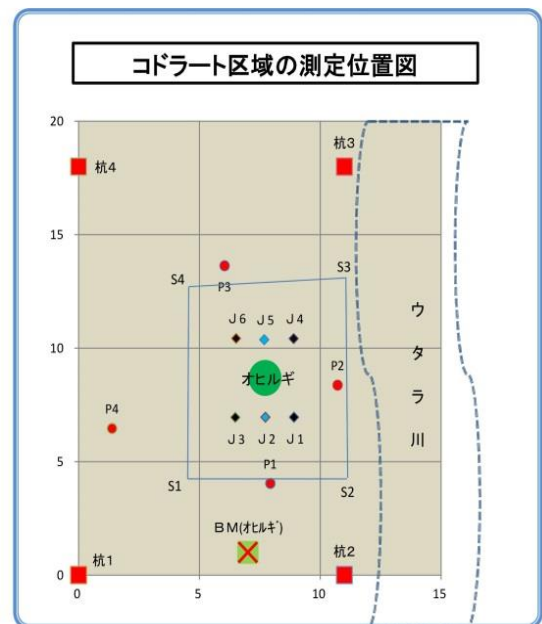


図3 新たな設定図

5 調査結果

(1) オヒルギの生育状況

オヒルギの樹高は 8.5m、胸高直径は 99.8cm、根回りは 345cm でこれまで同様に形状に変化は見られなかった。また、幹、枝については、いずれも異常は認められなかった。

(2) 周囲の光環境（開空度）

2点における開空度は J2 が 21.5%（21.3%）で J5 が 19.3%（19.9%）であり、平成 27 年度と比較して大きな変化は見られなかった。注：（ ）は平成 27 年度の開空度。

(3) 地盤高

6点における各地盤高は表 1 のとおりである。各測定地点で平成 27 年度より地盤が高くなっていた。今回の調査では原因は分からなかったが、周辺では陸地化が進んでいることから、今後も注視していくことが必要である。

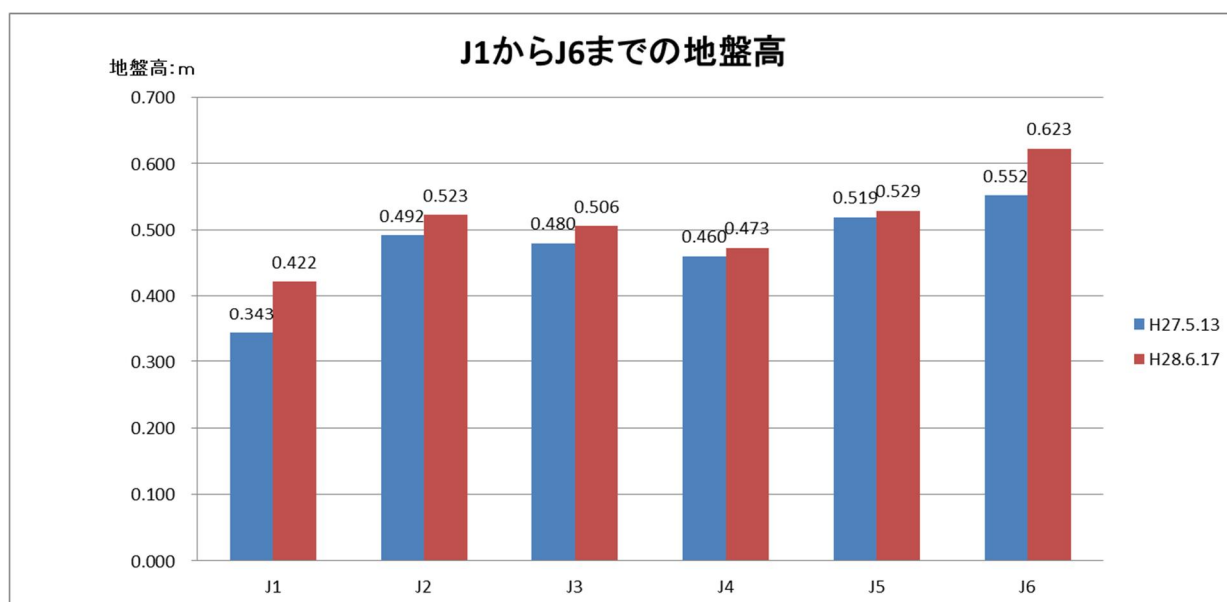


表 1 地盤高

(4) 周辺植生及び着生植物

S1 から S4 内における植生の結果は表 2 のとおりである。平成 27 年度と比較するとオヒルギが 14 本増であった。サガリバナについては変化はなかった。

なお、着生植物については今年度も確認されなかった。

表 2 周辺植生 単位:本

		オヒルギ	サガリバナ	備考
樹高 (cm)	50	18		
	100	60	1	
	150	15		
	200	7		
	250	9	1	
	300			
	350	4		
	計	113	2	

6 まとめ

今年度は、8月（台風15号）と9月（台風21号）に大型台風が襲来し、オヒルギへの影響が心配されたが、通過後の確認では特に異常は認められなかった。

オヒルギは一定の生育状況を維持しており、周辺の稚樹も多く発生し成長もしていることから、周辺の生育環境も良好であると考えられる。

しかし、オヒルギは非常に老齢木であるとともに、周辺の陸地化が進んできているため、オヒルギの状態や周辺環境の変化を注視していく必要がある。

今後もモニタリングを継続して実施し、異常が確認された場合には「保全協議会」に報告することとする。

平成29年3月31日

西表森林生態系保全センター